

中島湘煙の「伯爵の令嬢」について

山根賢吉

ここ数年、中島湘煙についての研究成果があいついで発表されてきている。管見に入つたものだけでも、北田幸恵氏の「近代女流文学の出発—中島湘煙の文学—」(『北方文芸』第17〜18、16号 昭56・2・3、7)、関礼子氏の「演説筆記『函入娘』をめぐって—湘煙の登場期—」(『日本文学』第336号 昭61・6)、和田繁二郎氏の「中島湘煙『山間の名花』覚書」(立命館文学)第435・436号 昭56・10)などがあり、それぞれ湘煙の文学や思想について鋭い考察が加えられている。

ところで、湘煙の残した小説はきわめてすくなく、現在までに判明しているのは、

「善悪の岐」(『女学雑誌』第69〜70、72号 昭20・7・8、のち単行本として昭20・11刊)

「山間の名花」(『都の花』第二巻第九号〜第十号、第三巻第十一号〜第十二号、第十五号 昭22・2・5)

「一沈一浮」(『文芸倶楽部』第二團秀小説 昭30・1のち『湘煙日記』昭36・3所収)

「花子の嘆き」(『女学雑誌』第59〜52号 昭36・8・9)

の四編で、「善悪の岐」は翻案であり、遺稿「花子の嘆き」は未完であり、「一沈一浮」はスケッチ風の習作に過ぎず、結局湘煙の代表作は、一般に未完と目されてはいるが、「事件的には未完と見えるが、内容的には完結したと言ふべき」(前掲和田氏「中島湘煙『山間の名花』覚書」)「山間の名花」ということになる。

ところが、右の四作品のほか、すでに北田氏の指摘されてい

るように（前掲「近代女流文学の出発—中島湘煙の文学（白）—」、「女学雑誌」一九五号（明23・1・11）の「新誌」欄に「○婦人教育神州の芙蓉 其一号大阪淑徳会より発行したり、山口淳子会頭にして京阪各地の教育家数十名賛成家に列し、恰も婦人雑誌中の『国光』とも云ふべき姿にて生れ出でたり、湘煙女史の『伯爵の令嬢』と題す小説も見へたり、尚ほ追々と整理しいよ／＼完美せんことを待つ」とあり、北田氏は「この記事から明治二十二年中に『伯爵の令嬢』が発表されたと考えられるが、実物については未だ確認できていない。」と記されている。

筆者はたまたま「婦人神州の芙蓉」が国会図書館に所蔵されていることを知り、上京の度に閲覧を求めたが、長らく所在不明であった。ようやく昨春見つけたとのことで、早速閲覧し、「伯爵の令嬢」にお目にかかることを得た。

先ず雑誌そのものについて贅言を加えれば、「婦人神州の芙蓉」は、「女学雑誌」一九五号に紹介されているように、大阪淑徳会から発行された婦人雑誌で、発行所は創刊号から第七号までは、「大阪市北区中ノ島宗是町五十九番屋敷」で、第八号から「大阪市北区堂島北町二百十四番屋敷」に変わっている。創刊号から第四号までの編集人は阿部朝田、発行人は森田恩であ

るが、第五号から発行兼編集人は阿部朝田になっている。国会図書館蔵の「婦人神州の芙蓉」は第十一号までで、各号の発行年月日は次の通りである。

第一号	明治22年12月28日	第二号	明治23年1月14日
第三号	同年1月25日	第四号	同年2月10日
第五号	同年4月2日	第六号	同年4月15日
第七号	同年5月1日	第八号	同年5月15日
第九号	同年6月1日	第十号	同年6月15日
第十一号	同年7月1日		

第一号の「神州の芙蓉発行趣意書」の中に、

世の婦女に代つて木鐸を取り茲に淑徳会なるものを起し専ら中正不偏の主義を採り徳育を進めて以て美良の国粹と因襲の弊害とを取捨し聊か世に益せんとす

とあり、国粹主義の流れに裒されたものであることを示している。これを整理したのが第五号所載の「淑徳会規則」である。

そこには、

第一条 本会ハ淑徳会ト称シ之レヲ大阪ニ置ク

第二条 本会ノ目的ハ日本婦人ノ徳育ヲ増進シ佳良温雅ニ

シテ最モ有用ナル婦人ヲ養成スルニアリ

第三条 本会ハ前条ノ目的ヲ達センガ為メ隔月第二土曜日

ヲ以テ例会ヲ開ク但毎年一月ヲ以テ初会トス

第四条 本会ハ会員ノ勉学ニ便スル為メ毎月二回婦人神州教育雑誌ヲ発行ス
乃芙蓉ト題スル教育雑誌ヲ発行ス

とある。第四条の月二回発行はすでに創刊号に明記されているところであるが、先に記した各号の発行年月日によつて明らかたように、第五号までは、明治二十三年一月を除いて、実現されておらず、第五号から確實に実施されるようになった。従つて淑徳会及びその機関誌「婦人神州の芙蓉」は、明治二十三年四月から、本格的な活動に入ったと言ふことができよう。

「婦人神州の芙蓉」は、号によつて多少の変動はあるが、「修身」「講話」「史伝」「女子の実業」「時事」「文苑」「小説」などの欄があり、湘煙の「伯爵の令嬢」は「小説」欄を代表するものである。すでに第一号の「会告」の中に

小説 第一号ヨリ小説二個ヲ掲グベキ所各地方ヨリ来ル祝文中ニハ明年ニ越ス能ザル文章アルヲ以テ不止得第一号へハ有名ナル湘煙女史岸田俊子君ノものせし伯爵の令嬢ト題スル小説一個ヲ掲グ

とあり、もう一編の小説蘭溪女史の「門の稚松」は次号まわしにした旨が記されている。これは湘煙の名声を物語るものだが、すでに結婚して中島姓になっているのは彼女の彼女が、「岸田俊子」

と旧姓のままであるのは腑におらない。あるいは関西では旧姓の方が広く知られていたのかも知れない。なお第三号の目次にも「小説伯爵の令嬢 岸田俊子」とある。

「伯爵の令嬢」は第一号、第三号、第六号、第九号と断続的に連載されており、第十二号以後も連載された可能性はあるが、雑誌そのものが十二号以降は未確認のため、今は何とも言い得ない。筆者が確認した右の四号分の「伯爵の令嬢」は二つにわけることができる。すなわち第一号所載の部分と、第三号以下の部分とである。

第一号所載の部分は、松本という学生が、田宮という学生の下宿を早朝訪問したところ、田宮と同室の中西がすでに不在で、その行方を尋ねると教会へ行つたと言ふ。以下、松本と田宮が、中西の性行の激変を話し合うという筋で、湘煙の小説によく見られる会話の多い小説だが、二人の会話の中に

あれ程妙に国粹保存的の様な時勢に適しない人物がサンデーにはバブルヲ手にして教会へ行くよふになつたからどふも不思議なものだ

とか、

誰かが欧化主義を主張するとすぐにあれは洋人拝崇者デどれ程中のよかつた朋友ともだちでも交を絶つてしまふだらうそれ位

なのにな(中略)君西洋の宗教を奉ずるとは是が君不思議
だなけりやなにも不思議は世間はないのさ

とかあるところから推測されるように、国粹主義を奉ずる中西
が西洋崇拜に変わったようである。しかし彼は、新富座の演説会
で、

弁士が優勝劣敗といふ題でさ吾にはどうしても優者なる
外国人には譲与せざるを得ずと言放すや吾君あの日ごろ
無口の中西がさノウノウ……と連呼して已まないものだ
から遂に警官に制せられたがね

という行動をとっている。恐らく作者は、欧化主義と国粹主義
を止揚したような人物中西を二人の友人の口をかりて語ってい
るのであろう。

第三号以下では、第一号に登場した男性たちは全く登場せず、
話は伯爵の令嬢君子と下女豊との会話が中心となっている。第
三号では東京霞が関の樓閣に、

日本人には西洋間ばかりでは脚気が起るとか脳が塞がると
かで預かじめ夫人令嬢のご機嫌を損ねん事を畏れてにや
尤も閑雅なる日本作りの設けある其内の茶席様の処に東髪
のお嬢さん

がおり、彼女は、

紅なして朱かき髻、珠ならで珠の様な歯結ばんと氣遣ふに
あらで自然と結べるに口元唯少し背が低し然れども国粹保
存家はその低きところ尤も愛嬌が行渡り易いと答玉ふ何れ
にせよ鮮妍たるレデーには相違がござりませぬ

とあり、このレデーこそ「従三位伯爵筆竹某の令嬢君子」であ
り、この小説の主人公である。ここにも「国粹保存家」という
ことばがあることに注目したい。君子は今憂鬱な病にとりつか
れているが、豊も若い時に「勝手に病気を起して効もしない薬
を飲んで今から見ればどんなに馬鹿げているかもしれませぬ」と
語る。六号及び九号は、その豊の若い時の病で、これは言うま
でもなく恋病である。豊は十八の年、母とともに白髭明神に紅葉
見物に行き、茶店で美男子を見初める。それは母の知人の新川
の息子だった。ところが下女の竹は、新川の主人が妻に死別し
たのを機に、その息子を追い出して、自分が後妻に入り新川の
財産をおのがものにしてしようと考え、豊が新川の息子に恋してい
るのをかき出して、にせのラブレターを豊に渡す。新川の息子
にもにせのラブレターを渡す。ここで第九号は終っている。恐
らくこの後、豊の恋語りが済み、君子が自分の恋を語り、君子
の意中の人が中西であり、君子と中西の恋のなりゆきが語られ
るという風になるのであろうが、筆者の目にしたのはその発端

の部分のみということになる。

「婦人神州の芙蓉」が十一号をもって廃刊したかどうかは判明しないが、十一号の「会告」に

本紙第十一号紙上より衛生部門を設け且つ緊要の記事頗る多く為めに本誌には小説一回丈休みたり次号より引続き発載す看客諸君幸に領せよ

とあるところから見れば、十二号以下を発行する意図のあったことは十分うかがわれる。続刊されたとすれば、当然「伯爵の令嬢」は連載されたであろう。湘煙はこの小説で、国粋主義の潮流を横目で眺めながら、新時代の恋愛を描こうとしたのであろう。

なお、第五号には次の湘煙の漢詩が掲載されていることを報告しておきたい。

冬日途上

湘煙女史

煙暈寒村欲雪天
枯林荒草鳥啼餘
由看點綴布帆縣
滿眼白雲知是海

卽事

全

鍾愛風花々豈知封娘教我儘多思
海裳不省朝來雨應恨前宵折取時

いずれも『湘煙日記』に収録されているが、前者には一部語句

の相違がある。